

インドにおける都市化・工業化と農民の対応 ——デリー大都市圏農村の事例——

南 埜 猛*

Urban and Industrial Impacts on Rural India : A Case Study of Suburban Village in Delhi Metropolitan Area

Takeshi MINAMINO*

キーワード：インド農村，都市化，工業化，カースト，デリー大都市圏

Keywords: rural India, urbanization, industrialization, caste,
Delhi Metropolitan Area

目 次

はじめに	IV. 経済構造
I. 地域概観	1. 職業と通勤
1. 自然	2. 農業
2. 歴史	3. 商業
3. 社会集団（カースト）	4. 工業
II. 人口構造	5. 伝統的職業
1. 人口	V. 生活・社会環境
2. 家族形態	1. 教育
3. 結婚と通婚圏	2. インフラ整備
4. 居住空間	3. 消費と消費者行動
III. 行政・政治構造	4. 信仰・寺院・儀礼
1. 行政組織の階層	おわりに
2. パンチャーヤット	

はじめに

1990年代に入ってから，経済自由化政策の導入等によって，インドの都市化・工業化は一層の加速を増して，進展しつつある。そしてその影響の範囲は，都市周辺の農村を取り込み拡大している。これまで，カーストやジャジマーニー制によって特徴づけられる社会構造で理解がなされてきたインド農村も，都市化・工業化の影響を受け，大きく変貌を遂げつつある。

*兵庫教育大学；Hyogo University of Teacher Education

近年のインド農村研究においては、カーストを固定的にとらえるのではなく、そのモービリティ¹⁾に注目がなされている。モービリティをもたらすきっかけとなる都市化・工業化の影響について考えてみると、その影響はもちろん中間カースト²⁾だけでなく、全てのカースト・グループに、様々な影響をもたらしていると思われる。しかしその影響の受け方や対応は一樣ではない。都市化・工業化の影響を受けず、依然として旧来の体制や様式を維持する社会的要素も存在していると思われる。

本研究は、インドの大都市周辺農村を対象として、都市化・工業化の影響と農民の対応を、経済的側面を中心としながら、人口、行政・政治、生活・社会等の諸側面から、総合的に究明することを目的とするものである。その方法論的特徴としては、カースト・グループの社会的枠組み³⁾を軸として、都市化・工業化の諸側面を悉皆調査ならびにインテンシブな聞き取り調査によって、把握しようとしたことである。

研究対象村のウツタル・プラデーシュ州R村を選定した理由は、同村がデリー大都市圏内に位置すること、新興工業団地（ノイダ（NOIDA）工業団地）に隣接していることから、都市化・工業化の影響を大きく受けている農村であると判断されたからである。さらに本研究の方法論的特徴を活かすために、上位カーストから最も下位の指定カーストまでの多様な社会階層を含むマルチ・カースト社会を構成する農村であったことである。

現地調査は1997年11月から12月にかけて実施し、本調査では1995年の選挙人名簿⁴⁾をもとにして、悉皆調査⁵⁾（以下、1997年調査とする）を実施した。以下の考察は、この1997年調査ならびに個々の事項に関するサンプル調査・聞き取り調査、さらに郡役所・開発事務所で収集した資料をもとにして行なったものである。

I. 地域概観

1. 自然

R村は、行政的にはウツタル・プラデーシュ州ゴータマブッタナガル（Gotama Buddha Nagar）県ダドリ（Dadri）郡に属し、デリーとはヤムナー川を隔てた対岸に位置する。R村が隣接するノイダ工業団地⁶⁾は1977年以降開発が進められている新興の大規模工業団地であり、現在も開発計画は進行中である。

R村はヤムナー川とガンジス川の河間地⁷⁾にあり、ヤムナー川は、これまで幾度もその流路を変更してきた。それは村の歴史にも集落移転などの大きな影響を与え、また1970年代にヤムナー川の堤防ができる以前は、毎年のように洪水が発生し、この村の発展の妨げとなっていた。

R村が属する郡役所のあるダドリにおける1988年から1997年の10年間にわたる月別降水量データによると、年平均降水量は1013.5mmで、6月から9月の4カ月間のいわゆるモンスーン季に年間降水量の89.1%が集中している。10年間の内、最低の降水年は、今世紀最大の干ばつ年であった1988年の93.0mmである。1988年以外は750.0mm以上の降水があり、最大は1994年の1505.0mmであった。

2. 歴史

R村の歴史に関する文書は見あたらない。ここでは、現地での聞き取りをもとに、その歴史の復元を試みる。

後述するとおりR村の中心的カースト・グループはラージプート (Rajput) である。かれらは以前には、デリーの北、ハリヤーナー (Haryana) 州のソニパット (Sonipat) 県に住んでいた。今から200年前、この地域に移住してきた。その後、家族は4つに分かれてそれぞれの村を形成した。その当時のR村の位置はヤムナー川ほとり近くにあった。1940年代にヤムナー川の流路が大幅に変更し、そのためR村は、現在の地点に集落を移動させ、今日に至っている。

3. 社会集団 (カースト)

1997年調査において、R村の住民を大きく旧住民と新住民に区分した⁸⁾。さらに旧住民をカーストをもとに、ブラーミン (Brahmin)、ラージプート、ナーイ (Nai)、ドービー (Dhobi)、ジャータブ (Jatav)、バルミキ (Balmiki) の6つに区分した (表1)。ここでは、まずそれぞれのカーストの一般的な背景を説明する。

ブラーミンの伝統的職業は司祭、僧職であり、ヒンドゥー社会の中で最上位の地位を占めている。ラージプートは、この村の中心的カーストである。後述するように土地所有の面でも、また政治的にも優位に立つカースト・グループであり、シュリーニヴァースのいうドミナント・カースト (dominant caste)⁹⁾ に位置づけられる。ラージプートは武士階層であるが、伝統的に地主あるいは自作農として農業に従事してきた。ナーイの伝統的職業は理髪業である。そしてドービーの伝統的職業は洗濯である。ジャータブは、チャマール (Chamar) として知られているカースト・グループである。チャマルの伝統的職業としては、皮革加工が知られている。しかしチャマールは皮革加工を伝統的職業とする者だけに限らず、農耕や下層労働に従事する者も含んでいる (藤井, 1992)。R村のジャータブは、後者の農業や下層の労働に伝統的に従事してきた者である。バルミキは別名バンギ (Banghi) と呼ばれるカースト・グループであり、汚物清掃を伝統的職業とする。

この6つのカースト・グループを、ヴァルマの視点から見たカースト・ランキングは、上位よりバラモン階級のブラーミン、クシャトリヤ階級のラージプート、次にシュードラ階級に属するナーイ、そしてアウト・カーストの階級に属するドービー、ジャータブ、バルミキとなる。また現在の行政上のカテゴリーにおいては、ナーイが後進諸階級 (Other Backward Castes), ドービー, ジャータブ, バルミキが指定カースト (Scheduled Castes) に指定されている。

II. 人口構造

1. 人口

1997年調査の結果、村の総人口は1,175人、196世帯であった (表1)。そのうち旧住民は全住民の87.5%にあたる1028人であった。一方新住民は残りの147人であった。

旧住民内の各カーストごとの人口構成は、人口比率の高い順にラージプート (旧住民内で60.3%), ジャータブ (同11.9%), ブラーミン (同10.2%), ナーイ (同8.0%), バルミキ (同7.6%), ドービー (同1.9%) であった。このようにラージプートの人口比率が極めて高い。このようなR村のカースト構成は、この地域のカースト構成としては、標準的なものであるといえる。少し古いデータであるが Government of India (1966) によると、当時R村が属していたブランドシャハル (Bulandshahr) 県の指定カーストの割合は20.3%であり、指定カースト内での主要なカーストはチャマール, バルミキ, カティク (Khatik)¹⁰, ドービーで、それぞれの割合は72.0, 11.0, 6.0, 4.0%であった。これらの値とR村の値ときわめて近似値を示しており、カースト構成の面からみれば、R村はこの地域の典型村であると位置づけられる。

表1 R村における新旧住民・カースト別世帯と人口 (1997)
Table 1 Household and population in R village by caste, 1997

新旧別	カースト	ヴァルマ	行政上のカテゴリー	伝統適職業	世帯数	男	女	合計	1世帯の平均人数
旧住民	ブラーミン(Brahmin)	バラモン	—	僧侶	13	50	55	105	8.1
	ラージプート(Rajput)	クシャトリヤ	—	武士・農民	97	339	280	619	6.4
	ナーイ(Nai)	シュードラ	OBC	理髪業	14	43	39	82	5.9
	ドービー(Dhobi)	アウト・カースト	S.C.	洗濯	3	11	9	20	6.7
	ジャータブ(Jatav)	アウト・カースト	S.C.	皮革加工・農業労働者	20	69	55	124	6.2
	バルミキ(Balmiki)	アウト・カースト	S.C.	汚物清掃	13	41	37	78	6.0
小計					160	553	475	1028	6.4
新住民					36	79	68	147	4.1
総数					196	632	543	1175	6.0

O.B.C.: Other Backward Castes = 後進諸階級
S.C.: Scheduled Castes = 指定カースト
出所: 悉皆調査 (1997)

2. 家族形態

インドの農村社会を特徴づけるものの一つに合同家族がある¹¹⁾。ここではR村の家族形態について考察する¹²⁾。

R村における1世帯¹³⁾あたりの構成員数は6.0人である。新旧住民間では、平均で2.3人の差であった。カーストごとにみても、ブラーミンが8.1人と相対的に高い値を示したが、それ以外は5.9人から6.7人の間の値であり、カースト間においてはそれほど差はみられなかった¹⁴⁾。

表2は家族形態による分類の結果を示したものである¹⁵⁾。全体としては、核家族の割合が最も高く、60.2%を占めている。続いて多いのが、合同家族である。R村の合同家族率の22.4%という値は、インド全国の農村地域の合同家族率21.8%とほぼ等しい値である (Government of India 1981)

旧住民内の6つのカースト・グループを比較してみると、ブラーミンについて、他のカーストとは大きく異なった特徴が見いだされた。まず合同家族率が高いことに加えて、合同家族の内容についても、他のカーストに比べて、既婚キョウダイ型の割合が高い。既婚キョウダイ型は、親子型に比べて、長期にわたって合同家族が継続されることが多い。それ故にR村においてはブラーミンの合同家族志向が、他のカーストに比べて、かなり強いという特徴をもっていることが指摘できよう。

3. 結婚と通婚圏

インドの結婚に関する特徴として、幼児婚・若年婚が指摘されている。ここでは結婚年齢についての回答が得られた524名(男251名, 女273名)のデータをもとに、その特徴を検討してみる。R村における平均結婚年齢は男21.5歳, 女16.7歳で、わが国と比較してみ

表2 R村における新旧住民・カースト別の家族類型(カッコ内は%) (1997)

Table 2 Household type in R village by caste, 1997

新旧別	カースト	家 族 類 型					総 計
		単 身 家 族	準 核 家 族	核 家 族	補 足 核 家 族	合 同 家 族	
旧住民	ブラーミン	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (46.2)	1 (7.7)	6 (46.2)	13
	ラージプート	1 (1.0)	7 (7.2)	52 (53.6)	12 (12.4)	25 (25.8)	97
	ナーイ	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (57.1)	2 (14.3)	4 (28.6)	14
	ドービー	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	1 (33.3)	3
	ジャータブ	0 (0.0)	1 (5.0)	14 (70.0)	2 (10.0)	3 (15.0)	20
	バルミキ	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (76.9)	0 (0.0)	3 (23.1)	13
小 計		1 (0.6)	8 (5.0)	91 (56.9)	18 (11.3)	42 (26.3)	160
新住民		2 (5.6)	1 (2.8)	26 (72.2)	5 (13.9)	2 (5.6)	36
総 数		3 (1.5)	9 (4.6)	118 (60.2)	22 (11.2)	44 (22.4)	196

出所：悉皆調査 (1997)

た場合、かなり若いということがいえる。R村の都市化・工業化の契機となった事項（ヤムナー川の堤防の完成やノイダ工業団地開発の開始等）が、1970年代の中頃であることから、ここでは1975年以前と1976年以後に分けて、それぞれの結婚年齢について考察してみた。すると1975年以前の平均結婚年齢は男20.4歳、女15.5歳であるのに対して、1976年以後のそれは男21.9歳、女17.4歳と、それぞれ男1.1歳、女1.9歳、加齢したという結果が得られた。この加齢と都市化・工業化とを結びつけることはかなり難しいと思われる。その変化の幅がそれほど大きいものとは思われないからである。また1973年に最低結婚年齢が法律の改正によって、男21歳、女18歳に決められたことが、その要因のひとつとも考えられる。カースト別にみると、特に大きな変化としては、ジャータブの男の平均結婚年齢が、一気に4.3歳加齢した点があげられる。しかしジャータブの男の平均結婚年齢はもともと低く、4.3歳加齢したことで、他のカースト・グループとの差が縮まり、結果として、平均結婚年齢からみたR村におけるカースト間の格差はほぼなくなっている。

次に通婚圏についてみる。1997年調査によると、村内での結婚とみなされる事例は、わずかに3件のみで、いずれもラージプートであった。残りは、村外の者との結婚である。結婚による流入と回答した者は230名おり、内男性は3名でしかなかった（表3）。それらの内、出身地が同定されたのは216名であった。その59.7%が、自県を含む約60km圏内の近隣県に出身地があり、近隣県との通婚に関してカースト間での格差はそれほど見受けられない。一方、近隣県以外からの結婚の事例のほとんどが1県あたり1名であり、それは極めて個別的な理由によるものと判断される。その中で、ハリヤーナー州のソニパット県は唯一近隣県以外で2名以上の通婚者を出している。ソニパット県から来たものは、43名でそのすべてがラージプートであった。その数はラージプートの結婚流入者の31.2%にあたる。これは、R村の歴史で触れたように、R村のラージプートがもともとソニパット県

表3 R村の旧住民における通婚圏
Table 3 Marriage area in local people, R village

カースト	近隣県 (自県を含む)	近隣県以外		不明	総計
		ソニパット県	ソニパット県を除く		
ブラーミン	18	0	5	0	23
ラージプート	69	43	15	11	138
ナーイ	9	0	10	1	20
ドービー	2	0	1	1	4
ジャータブ	20	0	8	0	28
バルミキ	11	0	5	1	17
総数	129	43	44	14	230

出所：悉皆調査（1997）

に住んでいたことに起因する。そして今日でも、ソニパット県のラージプートととの社会的つながりを継続していることを示すものである。

4. 居住空間

図1は、R村における居住パターンを示したものである。まず旧住民についてみる。旧住民内のカースト間には、明確な住み分けが見られる。集落内において比高の高い部分にドミナント・カーストであるラージプートが占めている。ブラーミンはラージプートに囲まれあるいは隣接するように分かれて住んでいる。ブラーミンは分かれて住んでいるが、血縁であり先祖は同一である。ジャータブは集落の南、バルミキは集落の東に集住しており、この2つのカースト・グループとラージプートの居住地の間は比較的広い道であったり、また家が隣接する場合には入口が互いに反対側であるような形態をとっている。それに対してラージプートとナートの場合は同じ道を共有するなど、ジャータブやバルミキとの場合とは異なる関係がみられた。

次に新住民の居住空間に目をむけると、それは3つのパターンに分けることができた。第1のパターンは旧住民の家に間借りする形である。この新住民は旧住民の居住空間に分

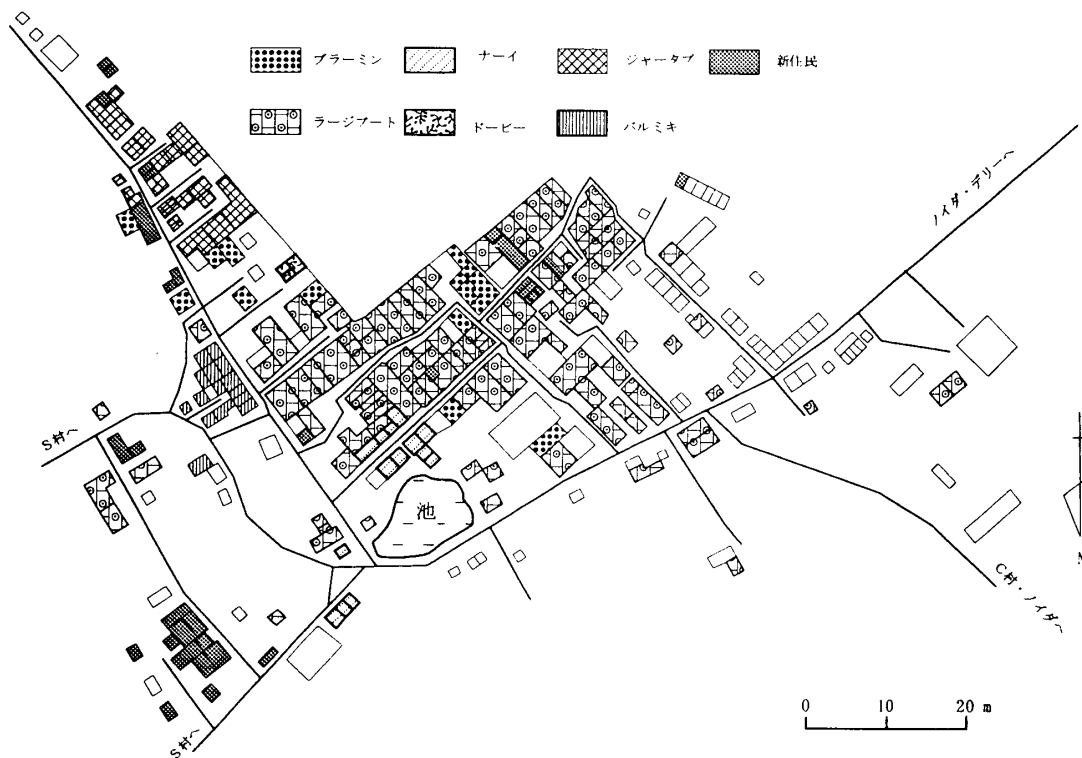


図1 R村における新旧住民・カースト別居住パターン (1997)

Fig. 1 Residential segregation in R village by caste, 1997

散的に住んでいる。この場合、当然ながら、旧住民と居住空間を共有することになる。そのため旧住民が受け入れする際には、新住民がどのカーストに属しているかが特に重視されている。第2のパターンは、村の北に形成されたコロニーと呼ばれる区域に新住民が集住する形である。コロニーに住む新住民の特徴は、持ち家でかつ家族で住んでいる世帯が多い点にある。またノイダなど村外に就業地を有する者が多い点も特徴の一つである。コロニー内において、カーストによる住み分けの傾向はみられない。第3のパターンは、旧住民が建設・経営している借家に住むパターンである。これは都市化への旧住民の対応であるといえる。すでに集落の南西部に6軒の借家が建設されており、今後、このパターンがさらに増えてくるものと予想される。

以上のように、今回の調査時点においては、旧住民の居住空間では比較的明瞭な形で住み分けが現在でもみることができた。また新旧住民間の混住化はそれほど進んでいない。今後は集落の外延部において、旧住民の新家の建設や借家の建設が進み、その結果集落が拡張し混住化が進むと予想される。

III. 行政・政治構造

1. 行政組織の階層

インドの行政単位は上位より、州 (state)、県 (district)、郡 (tahsil)、市町 (town)・徴税村 (village) となっている。R村は1961年の時点ではブランドシャハル県シカンドラバド (Sikandrabad) 郡に属していたのが、1974年に新設されたガジヤバード (Ghaziabad) 県に含まれるとともに、郡レベルにおいてもダドリ郡に組織替えされている。さらに1997年には新設のゴータマブッタナガル県に含まれるようになっていく。このような行政組織の度重なる改組・変更は、ノイダ工業団地の開発が進むにつれ、人口が増加し社会的機能も高度化する中で、より高いレベルの行政が求められた結果であり、R村をとりまく環境が都市化してきていることを示しているといえよう。

2. パンチャーヤット

R村のパンチャーヤットは1990年までの選挙では1村単独で¹⁶⁾、1995年の選挙からは隣りのS村と2村合同で組織するようになっていく。

表4は、1990年ならびに1995年に選出されたパンチャーヤット・メンバーのカースト別の人数を示したものである。1990年はR村1村でパンチャーヤットが設定されていたので、12人の議員が選出されている。その内、8人がラージプートより選出されている。ここで

村内のカースト別の有権者数の割合と選出議員数の割合とを比較してみよう。有権者数については、入手できた1995年の選挙人名簿の数を基準にする。有権者数においても、最大多数を占めているのがラージプートである。次に多いのが不明11.9%である。不明には、現在R村には居住しておらず、現実には他地域に転出している者64名を含んでいる。これらの多くは、選挙上の戦略のために、選挙権をあえて村に残している者であることが確認された。さて1990年の選挙において、カースト別の有権者の割合からみて1名くらいは選出されてもよさそうなブラーミンはゼロであり、ラージプートの議員の割合がその分高くなっている。これはR村においてブラーミンとラージプートは、近い関係をもっており、ブラーミンの票がラージプートの立候補者へ流れた結果と推察される。ナーイ、ジャータブの議員の割合は、ほぼ有権者の割合に近い。それに対して、バルミキにおいて議員の割合が高くなっているのが目につく。これは留保制度¹⁷⁾によるものである¹⁸⁾。以上のように1990年の時点では、議員の割合に格差はあるものの、ほぼすべてのカースト・グループから1名以上の議員が選出されており、各カースト・グループはそのグループ内に政治の窓口を有していたといえよう。

次に1995年の選挙結果を考察してみる。1995年は前述のとおり選挙区の改正により、R村からの議席数は12から5へと大きく減少した。1995年の選挙では、その5議席の内4議席をラージプートが占め、残りの1議席はジャータブが占めるという結果になった。その結果、R村における政治の窓口は、ラージプートが大部分を占有する形になった。なおジャータブの議席は留保制度によるものである。政治面でのラージプートへの一極化の傾向は

表4 R村におけるパンチャーヤット・メンバーの属性
Table 4 Attribute of panchayat member in R village

カースト等	有権者数 1995年		議員数 1990年		議員数 1995年*1	
ブラーミン	51	(7.8)	0	(0.0)	0	(0.0)
ラージプート	348	(53.0)	8	(66.7)	4	(80.0)
ナーイ	49	(7.5)	1	(8.3)	0	(0.0)
ドービー	8	(1.2)	0	(0.0)	0	(0.0)
ジャータブ	53	(8.1)	1	(8.3)	1	(20.0)
バルミキ	39	(5.9)	2	(16.7)	0	(0.0)
不明*2	78		0	(0.0)	0	(0.0)
新住民	—	—	0	(0.0)	0	(0.0)
S村	—	—	0		7	
合計	656	(100)	12	(100)	12	

* 1：議員の割合はR村の獲得議員数5を母数とする。

* 2：不明には転出者(64名)を含む

出所：1995年選挙人名簿ならびに現地聞き取り調査

明白な事実である。この状況になったのは、議員定数の減少のために、議席獲得必要得票数が上昇し、有権者数が相対的に少ないジャータブやバルミキが議席を確保することがより困難になったことが最大の要因である。それに加えて都市化・工業化とのかかわりが考えられる。つまり後述するR村の就業構造でみるように、ジャータブ、バルミキは村外就労がふえる傾向にあり、そのため村内の政治への関心が低下してきていることが考えられる。またウツタル・プラデーシュ州におけるパンチャーヤットの影響力の低下が指摘される。ウツタル・プラデーシュ州では、より効率的な開発行政を進めるためにパンチャーヤットではなく、開発行政に直接かかわるBDC (Block Development Committee) を重視する傾向にある。さらに新しい選挙区の設定も理由の一つに考えられる。新しい選挙区においてはS村の議員が過半数を占めており、聞きとりによれば、S村優先のパンチャーヤットの運営がなされるようになってきていることが指摘された。事実新しいパンチャーヤットになってからR村への開発等の補助金も少なくなっている¹⁹⁾。

IV. 経済構造

1. 職業と通勤

表5はカースト別の就業状況を示したものである。農業関係者は、全就業人口の46.7%しか占めておらず、特にかつて農業関係に多くが従事していたジャータブなどは、調査時点では農業関係を主職業とする者は全くいなくなっている²⁰⁾。

さて農外就労に注目してみると、各カーストごとに異なった特徴がみいだされる。まずブラーミンは管理職や教師、工場労働者、それも常勤として雇用されている。この点は、後述するようにブラーミンが高学歴であることに対応していると考えられる。また村内において、クリーナー製造工場の経営や小売業を営む者も出てきている。ラージプートはその母集団自体が大きいこともあって、特に多様な職種への展開がみられた。ナーイとドービーで共通している点は、伝統的職業そのものあるいはそれに関連する職種の職業についている場合が多い点である。バルミキについても伝統的職業の継続の傾向がみいだされるが、留保制度によって公務員の割合が高くなっている点にも特徴がある。

このような職業の展開の相違は就業地へも反映されている(表6)。ブラーミンは自作農として村内が多いが、それに続いて就業地はデリーが多くなっている。ラージプートは自作農が多いので、就業地は村内に偏っている。それに対してナーイ、ジャータブ、バルミキは、村内よりも村外就労の割合が高くなっており、村外ではノイダでの就労が多くを占めている。なお新住民についても同様に、村外での就労の割合が高くなっている。女性

南楚 猛：インドにおける都市化・工業化と農民の対応

表5 R村における新旧住民・カースト別就業構造(1997)(%)

Table 5 Occupation of peoples in R village by caste, 1997

職業/カースト		ブラーミン	ラージプート	ナーイ	ドービー	ジャータブ	バルミキ	旧住民 合計	新住民 合計	総計	
給 与 所 得 者	農業								6.0	0.8	
	臨時農業労働者										
	臨時園芸労働者		1.4		40.0			1.5		1.3	
	建設・製造業		2.3	4.5			5.6	2.4	10.0	3.4	
	臨時工場労働者						20.0	0.3		0.3	
	工場警備員		0.5					0.3	2.0	0.5	
	常勤工場労働者	6.9	4.6	31.8			4.8	6.0	18.0	7.6	
	臨時建設作業員						2.8	0.3	22.0	3.1	
	建設現場監督		0.5					0.3		0.3	
	塗装業者	3.4						0.3		0.3	
	縫製業者						5.6	0.6	2.0	0.8	
	家具製造業者						5.6	0.6		0.5	
	会社員			0.5				4.8	0.6	0.5	
	事務員							4.8	0.3	0.3	
	雑役夫								1.2	1.0	
	管理職	10.3	0.5						0.6	4.0	
	清掃夫						9.5	0.9		0.8	
	警備員	3.4	0.9					0.3		0.3	
	施設(水道)						2.8				
	サービス業									2.0	0.3
	コック										0.3
	庭師						2.8		0.3		0.8
	教師	3.4	0.5				2.8		0.9		1.8
	運転手		1.8	9.1					1.8	2.0	0.3
	病院ヘルパー			4.5					0.3		0.3
	家政婦			4.5					0.3		0.3
	清掃業者							28.6	1.8		3.1
	店員		2.8				13.9		3.3	2.0	0.8
	金融			0.5					0.3	4.0	1.8
	事務員		2.8						1.8	2.0	0.8
公務員			0.5			5.6		0.9	2.0	0.8	
庭師								0.9	2.0	0.8	
雑役務員	6.9	0.5						0.9		0.8	
警察		0.9				2.8		0.9		0.3	
郵便							4.8	1.8	4.0	2.1	
清掃員							28.6	0.6		0.5	
警備員	3.4	0.5						3.0		2.6	
水道	3.4	2.8					14.3	2.7	2.0	2.6	
その他	3.4	1.4		20.0	11.1						
給与所得者合計		44.5	25.7	54.5	80.0	61.1	100.0	38.7	84.0	44.6	
自 営 業 者	農業	44.8	62.4	22.7		30.6		49.8	2.0	43.6	
	農業										
	ミルク仲買人		1.4					0.9	2.0	1.0	
	建設・製造業	3.4	0.5					0.6		0.5	
	小規模工場経営者			0.9				0.6	2.0	0.8	
	建設業							0.3		0.3	
	家具製造業者					2.8		0.3		0.3	
	塗装業者	3.4						0.3		0.3	
	服屋		0.5	4.5		2.8		0.9		0.8	
	サービス業										
	床屋			13.6				0.9		0.8	
	医者			4.5				0.3	2.0	0.5	
	コンピューター関連		1.4					0.9		0.8	
	ポンプ修理工								6.0	0.8	
	小売業	3.4	4.6					3.3	2.0	3.1	
	クリーニング屋				20.0			0.3		0.3	
	教師		0.9			2.8		0.9		0.8	
運輸業		0.5					0.3		0.3		
運転手		0.5					0.3		0.3		
臨時運送業者							0.6		0.5		
不動産業		0.9									
地主											
自営業者合計		55.0	74.3	45.5	20.0	38.9		61.3	16.0	55.4	
就業者総計		29	218	22	5	36	21	331	50	381	

出所：悉皆調査(1997) なお、ここではR村在住者のみを対象としている。

表6 R村における新旧住民・カースト別就業地 (1997)
Table 6 Working place of peoples in R village by caste, 1997

新旧別	カースト	村 内	隣接村	ノイダ	デリー	その他
旧住民	ブラーミン	51.7	0	17.2	31.0	0
	ラージプート	69.0	2.7	18.8	7.5	2.0
	ナーイ	43.5	4.3	34.8	17.4	0
	ドービー	16.7	0	50.0	33.3	0
	ジャータブ	36.1	2.8	52.8	5.6	2.8
	バルミキ	4.8	0	71.4	23.8	0
小 計		58.4	2.5	26.5	11.1	1.6
新住民		35.2	0	42.6	22.2	0
全 体		55.4	2.1	28.5	12.5	1.4

出所：悉皆調査 (1997)

の村外就労の事例は極めて少なく、女性就労者67名の内、わずかに6名だけであった。いずれも就業地はノイダで、職種は清掃関係、公務員・雑役、工場労働者、コンピュータ関係であった。また村内に就業しているもののほとんどは農業に従事していた。このように都市化・工業化の影響が強くみられるR村であるが、女性の社会進出はまだまだ少ない段階にあるといえよう。

2. 農業

(1) 概要

ここではまずR村における土地（農地）所有の状況について述べる。表7で示されるように全土地所有²¹⁾の84.8%はラージプートが占めており、続いてブラーミン、ジャータブ、ナーイ、バルミキであり、ドービーは土地を所有していない。1世帯あたりの所有面積を比較してみても、ラージプート・ブラーミンとその他のカースト・グループとの間には大きな差が存在している。

次にR村の農業をとりまく状況の変化について触れておく。R村の対岸には、デリーの中央市場の一つであるオクラ (Okhla) がある。オクラは特に野菜を中心とする市場である。1984年に村から約2kmの地点にオクラ橋が完成し、また1992年には、同橋の改修が行われ、それによって自動車・トラックの通行が可能となった。橋ができることで、デリーへの近接性は飛躍的に高まり、それは農業経営にも大きな影響を与える結果となった。さらにヤムナー川左岸の地域においても、ノイダ工業団地の開発にともなう人口増加により、新たな市場と消費地が徐々に成立してきている。

表7 R村における新旧住民・カースト別土地所有 (1997)
Table 7 Landholding of peoples in R village by caste, 1997

新旧別	カースト	所有面積 (a)	(%)	1世帯当たり の所有面積(a)
旧住民	ブラーミン	826.7	(7.8)	63.6
	ラージプート	9008.9	(84.8)	92.9
	ナーイ	290.9	(2.7)	20.8
	ドービー	0	(0.0)	0.0
	ジャータブ	455.6	(4.3)	22.8
	バルミキ	42.2	(0.4)	3.2
小計		10624.3	(100)	66.4
新住民		0	(0.0)	0.0
総数		10624.3	(100)	54.2

出所：悉皆調査 (1997)

(2) 作付け作物の変化

インドでは1960年代後半より緑の革命が進展した。R村と同じ県内の村を調査した Etienne (1982) によれば、調査村においては1966年にトウモロコシ、1966-67年に小麦の高収量品種が導入されている。この村はR村と同様に用水路灌漑先進地域であるドアーブ地域にあって、用水路灌漑の恩恵を受けていない点で、同じ条件下にあるといえる。そこでR村についてみると、高収量品種は1970年代半ばと遅かった。その理由は、ヤムナー川の洪水の危惧にあった。それが1976年に堤防が建設されたことで、農民の農業への投資意欲が向上した。そしてしだいに高収量品種や化学肥料等の導入がなされるとともに、トラクターなどの農業機械が導入されるようになり、さらに井戸灌漑が普及した。

表8は、1986年から1995年の10年間の作物別作付け面積の推移を示したものである。元データはR村の土地台帳内の集計表であるが、?で示しているのは読みとれなかったものである。また作期はカリフ、ラビ、ザイドの3つの作期²²⁾があるが、年によってはザイドの数値がない。これは調査しなかったことによるのか、あるいは本当に作付けがなされなかったのかは不明である。このようなデータの不完全性より、この表の数値に対しては、絶対的な信頼を置くことはできないが、傾向を見るには十分耐えうる資料であると判断する。

まず全体的な傾向をみることにしよう。10年間の作付け面積は平均して113.91haである。年によって増減の変動があり、経年的な一定の傾向はみられない。3つの作期のうち、作付け面積が多いのはラビである。この10年間でカリフがラビより多かったのは、1991年のみである。ザイドは記録の無い年もあり、また記録がある年で最も多くの作付けをなされたのは1987年の22.09haであり、概してザイドが占める割合は小さい。

表 8 R村における作物・面積の変化 (1986-1995) (ha)
Table 8 Changes of crops and its harvest area in R village, 1986-1995

	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
飼料	11.15	11.30	12.54	9.56	14.42	41.52	26.15	42.49	42.96	64.92
トウモロコシ	7.50	9.21	6.28	7.67	12.38	18.68	8.82	6.89	4.38	4.38
野菜	4.12	6.91	4.69	2.28	5.13	3.98	2.74	3.06	1.66	1.68
サトウキビ	1.92	4.38	1.61	0.91	2.06	3.01	0.66	0.63	1.59	1.24
チリ	0.13	1.48	0.77	0.47	0.70	2.34	0.23	0.13	0.79	0.51
?	2.54	1.33	0.61	0.34	0.13	2.34	トウモロコシ	0.16	サトウキビ	
		0.98	0.53	0.24			サトウキビ	0.16		
		0.45	0.34	0.13						
		0.13	0.27	0.10						
		米	0.20							
		米	0.16							
小麦	52.31	81.09	57.08	65.35	59.72	48.27	49.60	40.29	64.01	65.43
サゴウキビ	3.37	2.14	3.54	8.73	4.60	9.42	3.42	6.42	4.54	5.07
ジャガイモ	2.40	0.97	3.28	3.50	4.09	5.56	飼料	4.21	飼料	3.75
ダイコン	1.24	0.64	1.97	0.57	1.02	2.24	3.22	1.52	2.49	3.25
豆類	1.20	0.54	1.81	0.63	0.63	2.19	2.53	0.73	2.33	1.90
ニンジン	0.64	0.54	0.44	0.86	0.03	0.86	0.98	0.54	0.33	1.08
タマネギ	0.49	?	0.32	?	?	0.81	0.73	0.33	1.29	0.97
トマト	0.05					0.52	0.35	0.54	0.32	0.54
						0.51	0.25	0.33	0.10	
						0.08		0.54	masur	
						0.07		0.33	ジャガイモ	
スイカ	7.96	10.73								
飼料	3.10	5.56								
香料野菜	0.19	?								
トマト	0.18	タマネギ								
タマネギ	0.18	トウモロコシ								
サトウキビ	0.16	?								
ニガウリ	0.09									
カリア作	23.24	36.10	27.43	21.61	34.82	69.53	38.92	42.52	43.80	68.35
ラビ作	61.70	85.39	69.19	78.15	69.47	61.12	61.08	54.03	73.80	73.92
サイド作	11.87	22.09	4.77	4.77	4.77	4.77	6.40	6.40	サイド作	サイド作
合計	96.81	143.40	96.62	99.76	109.07	130.65	106.40	96.55	117.60	142.27

出所：R村土地台帳

作期ごとの作付け作物をみると、カリフでは飼料が中心である。この飼料用作物のほとんどは、かつて主食用に栽培されていたジョワールである。そして主食用作物はバジラやジョワールから小麦へと移行している。飼料用作物の作付け面積は、1991年以降、高い水準をたもっている。次に主要なものは野菜である。野菜のなかでもダイコンの作付けが目につく。1987年から1993年において野菜の作付けは常に5haを越えている。しかし1994年、1995年においては、飼料用作物の作付けが増加するのとは反対に、野菜の作付けは減少傾向にあることが読みとれる。ラビにおいては、小麦が常に40ha以上の作付けがなされており、第一の主要作物となっている。小麦以外はすべて10ha未満であり、飼料、ダイコン、ジャガイモ、大麦などが作付けられている。ザイドではスイカの作付けが目をつく程度で、そのスイカも最近では作付けがなされていない。

さてこのような作付けの変化から都市化とのかかわりは、どのようなことが言えるであろうか。1986年から1995年の10年間のうち、野菜の作付け²³⁾に注目すると、3つの期間に分けることができる。第1の期間は1985年から1987年である。この期間には、野菜の作付けが全体の作付けの15%以上を占め、その中心的作物はスイカである。第2の時期（1989年から1992年）になると、1989年において野菜の作付けが10%を切るものの、それ以外の年においては依然として15%以上の高い割合を維持し、中心的作物はスイカからダイコンへと移行している。そして第3の時期（1993年から1995年）になると、野菜の作付けが占める割合が10%を切り、一転して野菜栽培の後退期となっている。

このような野菜のめまぐるしい変化に対して、徐々に作付け面積を増やしてきたのが飼料用作物である。1995年における飼料用作物の作付け面積は全作付け面積の48.3%を占めるに至っている。これらの飼料用作物は、主としてウシの飼育に利用するものであり、村内の急速な畜産・酪農業の進展と連動している。ウシの飼育の主たる目的は搾乳であり、これはミルクの大消費地であるデリーとの近接性の向上と深くかかわっていると判断される。

以上のように、R村における作付けにみる都市化の影響は、まず野菜の作付け増加という形であらわれ、その後野菜の作付けは減少するものの、かわりにミルク生産とかかわって飼料用作物の作付けの増加という形であらわれている。野菜栽培の減少は、労働力とのかかわりも考えられる。つまり野菜栽培には、相当の集約的な労力を必要とするが、R村ではその農業労働者の確保が困難な状況にある。比較的広い土地を所有している大規模農家では、トラクターなどの機械化をさらに推進し、また村外からの農業労働者を受け入れて、精力的に野菜栽培を中心とした近郊農業を展開している者もみられるが、小規模の土地所有者が多いR村では、全体として農家自体の営農意欲は低く、それゆえに粗放的な飼料用作物の作付けへ傾倒しているのではないかと推測される。

(3) 畜産・酪農

表9はカースト別の家畜所有数(飼育世帯)を示したものである。R村において、最も多く飼育されている家畜は水牛であり、続いて牛である。また山羊、鶏の飼育もわずかであるが確認された。

水牛は旧住民においては79.3%の世帯で飼育されており、カースト・グループ別に見ると、1世帯当たりの所有頭数では、ブラーミンが2.9頭と最も高い値である。世帯単位でみると3頭以上を所有しているのは36世帯あるが、そのほとんどがラージプート(29世帯)、ブラーミン(5世帯)であり、バルミキとジャータブはそれぞれ1世帯しかない。またドービーの場合は、すべてが共同所有であった。

オスの水牛所有のほとんどがラージプートであるのに対して、山羊と鶏を飼育しているのはバルミキだけであった。また豚の飼育もバルミキの世帯によって行われていた。水牛のオスの所有がラージプートに卓越しているのは、水牛のオスが主として農地の耕起での利用を目的としており、この村の農地所有がほとんどラージプートに占められていることと関係していると判断される。一方、山羊、鶏、豚の飼育がバルミキに限られている点は、これらの小型肉食用家畜の飼育という行為が、インド社会の中では低く位置づけられていることに起因すると考えられる。

さて水牛飼育の主たる目的の一つはミルクの生産である。生産されたミルクは自家消費される以外は、市場に出される。その過程で、生産者と消費者の仲介の役割を果たしているのがミルク・ミドルマンである。調査時点で、村内には9人のミルク・ミドルマンが確認された。ミルク・ミドルマンと生産者との関係について聞き取り調査を行ったところ、

表9 R村における新旧住民・カースト別家畜所有数(1997)(頭・羽)
Table 9 Number of livestock in R village by caste, 1997

新旧・カースト	牛		水牛		山羊	鶏				
	メ	ス	オ	ス						
旧住民										
ブラーミン	4	(4)	4	(4)	23	(8)	0	(0)	0	(0)
ラージプート	23	(18)	45	(38)	195	(84)	0	(0)	0	(0)
ナーイ	0	(0)	1	(2)	9	(9)	0	(0)	0	(0)
ドービー	2	(2)	0	(0)	3	(3)	0	(0)	0	(0)
ジャータブ	2	(2)	3	(3)	23	(16)	0	(0)	0	(0)
バルミキ	1	(1)	1	(1)	14	(9)	3	(2)	37	(7)
小計	32	(27)	54	(48)	267	(129)	3	(2)	37	(7)
新住民	2	(2)	0	(0)	6	(5)	0	(0)	0	(0)
総計	34	(29)	54	(48)	273	(134)	3	(2)	37	(7)

()内は保有世帯数
出所：悉皆調査(1997)

どのミルク・ミドルマンにミルクを売るかについては、ミルク・ミドルマンとの人間関係や買い取り価格を基準に決定されるとのことであった。近年においては、特に買い取り価格の要素が重視されるようになっており、他村のミルク・ミドルマンに売ることが増えていくとのことであった。またミルク・ミドルマンと消費者との関係についてみると、彼らの販売形態は大きく分けて2つに分類できる。一つは菓子屋などの店舗への販売である。もう一つは各家への直接の販売である。後者については、主たる販売地域が、デリー市内の住宅地区で、いずれもR村から直線距離で、約11km以内の範囲にあり、その経路においてノイダ橋は重要な役割を果たしている。販売先の拡張においては、主として既購入客からの口コミによってなされている。

(4) 機械化の展開と外部労働力の導入

ノイダ工業団地の開発ならびにデリーへの近接性の向上は、R村の人々に新たな雇用の機会を提供することになった。それまで農業労働者などしか職業の選択が限られていた人々は、ノイダとデリーにおける農業以外雇用の就業機会を求め、農業から離れていった。その結果、これまで村内の農業労働者に農作業を依存していたラージプートなどの地主階層は、その農業経営のあり方に転換を迫られることとなった。つまりR村においてその担い手であったのがジャータブ、バルミキ、ナーイ、低層のラージプートであった。それらが、都市化・工業化の過程で村外において職を得ることで、R村内の農業労働者の絶対的不足の事態が発生したのである。その段階で、ラージプートなどの地主達は次の2つの対応をみせた。

第1の対応は、機械化の導入である。R村における最初のトラクターは、1976年に導入されている。その後、トラクターの導入はあまり進まなかったが、この10年間に急激にトラクターを購入する者が増え、1997年調査によれば、村内でトラクターを所有する世帯は35世帯に達している。そして、このトラクターを所有する世帯は、すべてラージプートであった。

第2の対応は、村外からの農業労働者の導入である。調査時において、12名の村外からの農業労働者が確認された。彼らはいずれもビハール州の同一村の同一カーストに属するものであった。彼らは、季節労働者であり、通年R村に住んでいるのではない。聞き取りによれば、彼らの出稼ぎ先は、パンジャブ、ハリヤーナーなどにおよび、それぞれの地域の作付け、収穫時期に対応して移動しているとのことであった。

3. 商業

図2は集落内の店舗の分布を示している。村には20の店舗が確認された(表10)。その内、5年以上前に開店した店はわずかに6店にしかすぎず、その6店中4店は雑貨店であり、残りはナーイの理髪業と新住民の医者であった。14店はこの5年間に新たに開店したもので、調査時からの1年間に限ってみても10店の開店がみられ、最近、急激に商業活動が活発になっていることが伺える。

このような急激な商業活動の動きの要因としては、どのようなものが考えられるであろうか。確かに新住民の流入やノイダ工業団地での就労によって現金収入が増加し村内購買力が増加したことなど、R村内部の変化もその一因であるとは考えられる。しかし人口規模や周辺の商業地の発展からみて、この店舗数は過剰であると思われる。その他の要因として考えられるのは、ノイダ工業団地の開発への関心が、ここ5年間の内に急激に高まったことがあげられる。ノイダの既開発地区では、旧集落はそのままで残され、そこが計画外の商業地区として発展している。その状況を間近に見ていること、隣村の土地がすでにニューオクラ工業開発公社に収用されていること、さらに集落内にも工業団地就業者を対象とする賃貸住宅の建設が進んでいること、そしてインドの高い失業率を反映して失業中

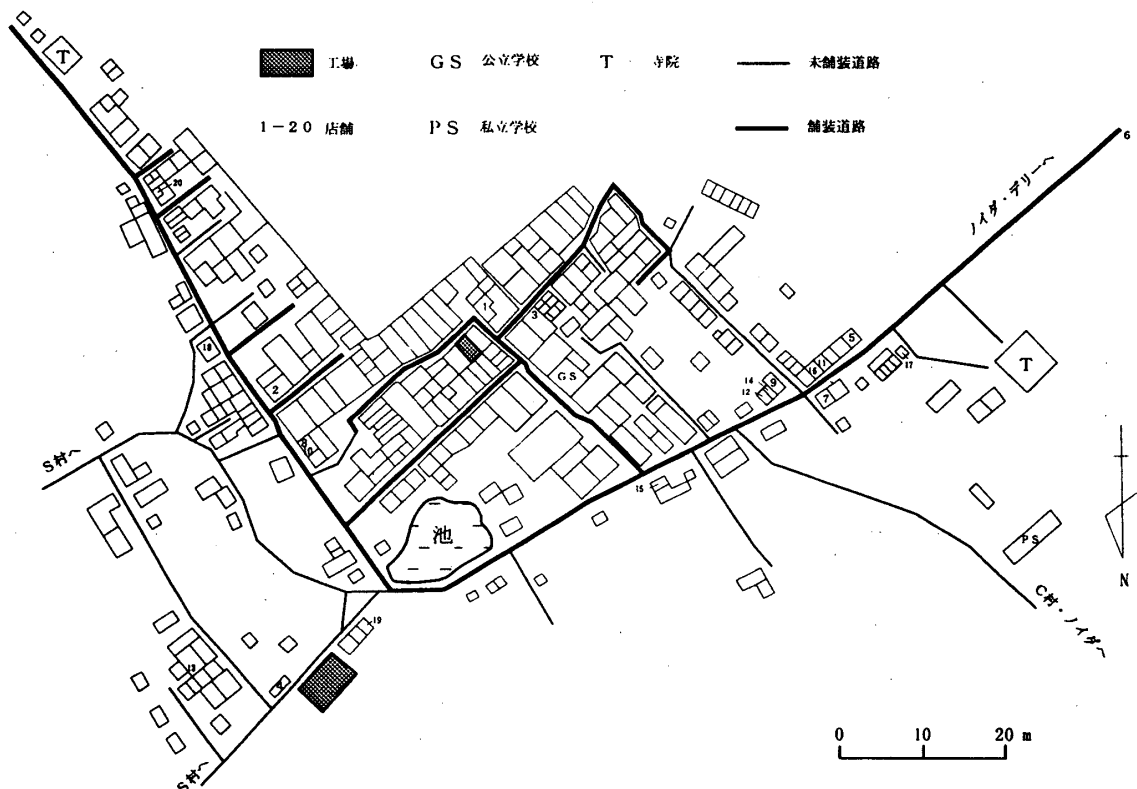


図2 R村における工場と村内店舗ならびに公的施設の分布
Fig. 2 Allocation of shops and public facilities in R village

表10 R村における店舗
Table 10 Shops in R village

No.	開店年	カースト	種別
1	40年以上前	ブラーミン	雑貨店
2	40年以上前	ラージプート	雑貨店
3	1986	ラージプート	雑貨店
4	1988	ラージプート	医者
5	1990	ラージプート	雑貨店
6	1991	ナーイ	床屋
7	1994	村外者	医者
8	1994	ラージプート	雑貨店
9	1995	新住民	飼料販売
10	1995	ラージプート	化粧品店
11	1996	ラージプート	肥料販売
12	1996	新住民	大工
13	1996	新住民	八百屋
14	1997	ラージプート	雑貨店
15	1997	ブラーミン	雑貨店
16	1997	ラージプート	雑貨店
17	1997	ラージプート	雑貨店
18	1997	ラージプート	雑貨店
19	1997	ナーイ	床屋
20	1997	ジャータブ	雑貨店

No.は図2に対応
出所：現地調査（1997）

の村内若年層への雇用創出などの諸要因が商業活動に向けられていると考えられる。現時点では、集落内の購買力に比して、店舗数ははるかに過剰な状況であるが、先行的な投資の要素が強いといえよう。

4. 工業

農村工業としては、一般的に機織り、壺作りや皮革加工などがあげられるが、R村において、そのような工業の成立はみられない。しかし、近年、新しい動きがみられた。それは農村工業といった性質のものではなく近代的な工業の成立である。ここでは新しく立地した2つの工場、つまりクリーナー製造工場とペン製作工場について考察する（図2）。

クリーナー製造工場の開設は1992年である。経営者は村内のブラーミンである。この経営者は、デリー大学の経済学部を卒業した後、デリーで営業の職に就いていたが、土地相続などの家庭の理由で村に戻ってきて、この工場経営をはじめた。従業員は妻とその他に2名（ラージプート）を村内から雇用している。

ペン製作工場の開設は、1997年の11月である。本社はデリー市内のオクラに1960年代に

設立された Super Fine Plastic Company Prv. Ltd である。その後同社は1978年にノイダに分工場を設立している。そして1992年にR村に工場用地を購入し、前述のように1997年11月に操業を開始している。同社がR村を選んだ最大の理由は、分工場のあるノイダに隣接していることである。工場監督として、R村の住民（ラージプート）を採用し、労働者の管理をまかせている。工場監督からの聞き取りによると、帳簿上に記載されている従業員は19名（内女性は16名）であり、その内村内の住民は8名（内女性は8名）であった。村内の従業員の所属カーストはすべてのカースト・グループにまたがっており、そこにはカースト間の区別は見られなかった。なお従業員は固定的なものではなく、操業開始前に工場の前に集まった者を必要に応じて採用するという形をとっており、1997年12月12日の調査においては15名が働いていた。賃金の支払いの方法は日払いであった。この工場労働者の特徴は女性の比率が高い点にあり、それは賃金を低く押さえることに起因している。

このように新規の工場の立地は、農村という空間に特に意味を持つものではなく、工業団地との近接性あるいは安価な地代といった要因で立地しているものであり、ノイダ工業団地の影響とみることができる。

5. 伝統的職業

各カースト・グループはジャジマーニー制とのかかわりで、伝統的な職業を有している。R村内の各カースト・グループの伝統的職業は表1に示したとおりである。ここでは、これらの伝統的職業が都市化・工業化の中でどのように変化し、あるいは継続されているかについて考察する。

ブラーミンの伝統的職業は司祭・僧侶である。この村のブラーミンで僧侶に専業している者が1名、そして他に職業を持ちつつ儀礼等の時のみにその司祭をつとめる者が2名いることが確認された。このように、全員ではないが、その一部が伝統的職業を継続していることが分かる。また、彼らは、現在でも、結婚などの儀礼において、重要な役割を果している。

ナーイの伝統的職業は理髪業である。ナーイの14世帯のうち、理髪業に従事している者がいる世帯は3世帯のみである。そのうち2世帯は村内で営業している。ジャジマーニー契約については、10年ほど前までは、年間契約で穀物での支払い²⁴⁾をラージプートの数家族と結んでいたが、現在は行われておらず、現金払い制へと移行している。

ドービーの伝統的職業は洗濯業である。ドービー3世帯のいずれも村内では洗濯業を営んでいないが、村外においてクリーニング屋やアイロンがけの職についている。親の世代においては、村内で洗濯業を行っており、その頃はナーイと同様に年間契約・穀物支払

いという形がとられていた。それが12年ほど前に親が死んでからは、村外に仕事を得たこともあって、現在は直接持ち込みで、アイロンがけのみを受付ける程度となっている。

R村のジャータブは、これまで小作人や農業労働者に就いている者が多かったが、現在それを主職業としている者はいなかった。

バルミキの伝統的職業は汚物清掃であるが、村内でこの職業に従事しているものはみあたらない。バルミキの9人は公務員に採用されており、いずれもが留保制度による採用である。その仕事内容は9人のうち6人は清掃業務が中心である。また民間企業においても2人が清掃業務で職を得ている。このようにバルミキにおいては、ジャージマーニー制とは別の形で、村外においてその伝統的職業の継続をみいだすことができる。

V. 生活・社会環境

1. 教育

まずR村におけるカースト別にみた教育水準について考察することにする。R村の20歳以上の村民の最終学歴を男女別にみると、学校教育を全く受けていない文盲者の割合は男性の22.4%に対して、女性は68.3%と高い割合を示す結果となった。男性については、全体の約半数が中等教育後期以上の教育課程まで進んでいる。このように現在の成人世代においては、男女間に教育面での大きな格差がみいだされる。次にカースト別に検討してみる。ここでは高等教育への就学状況に注目してみよう。男性において高等教育を受けた者はブラーミン、ラージプート、ナーイの3つのカースト・グループに属している者のみであり、その割合もそれぞれ20.0、10.1、5.3%とヒンドゥー社会の階層の序列と並列の形をとっている。女性においても同様の傾向がみいだされた。このように教育面の格差は男女間だけでなく、カースト間においても指摘される。

次に現在の教育環境についてみることにする。調査時において、R村には2つの小学校が立地していた。一つは公立学校であり、もう一つは私立学校²⁵⁾である。公立学校と私立学校のそれぞれの特徴を単純化すると、次のようにまとめられる。公立学校は政府の補助もあり安価に教育を受けることができるが、教育環境は私立学校のそれに比して良くない。一方、私立学校は恵まれた教育環境を提供しより高い教育レベルを目指すことができるが、その分、各家庭における負担は大きい。

このように特徴づけられる2つの学校にどのような子供が通っているのか。そこで両校の在籍簿をもとに考察する。ここでは村内の公立学校と私立学校のそれぞれの1年から5年までの合計に注目して考察する（表11参照）。まず男女別についてみる。女子の場合に

表11 公立・私立学校の生徒の属性 (1997) (人)

Table 11 Attribute of students in government school and private school in R village, 1997

公立・私立 学年	ブラーミン		ラージプート		ナーイ		ドービー		ジャータブ		バルミキ		旧住民合計		新住民合計		合計		総計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
公立学校	1	0	0	2	1	0	0	0	0	3	2	0	0	5	3	2	3	7	6	13
	2	2	0	2	3	2	2	0	0	0	1	2	3	8	9	0	3	8	12	20
	3	1	1	3	2	0	0	0	0	0	3	0	1	4	7	0	2	4	9	13
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	4	1	0	0	4	1	5
	5	0	1	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	2	3	0	0	2	3	5
公立学校合計	3	2	7	7	2	2	0	0	8	8	3	4	23	23	2	8	25	31	56	
私立学校	1	0	1	4	3	0	0	0	0	1	0	0	4	5	2	0	6	5	11	
	2	0	2	8	5	0	0	0	0	0	0	0	8	7	1	0	9	7	16	
	3	1	1	2	2	1	0	1	1	0	0	1	5	5	1	0	6	5	11	
	4	0	2	7	1	2	0	0	0	1	0	0	9	4	3	0	12	4	16	
	5	0	1	8	8	1	1	0	0	0	0	0	9	10	2	0	11	10	21	
私立学校小計	1	7	29	19	4	1	1	1	0	2	0	1	35	31	9	0	44	31	75	
総数	4	9	55	38	7	5	1	1	9	10	3	5	79	68	12	10	91	78	169	

出所：各学校の学生名簿ならびに悉皆調査 (1997) より作成

は公立学校と私立学校の在籍数はほぼ等しい。一方男子の場合には公立学校が36.2%、私立学校が63.8%と私立学校に極端に偏っている。20歳以上の成人世代の学歴の分析結果と同様、インドでは次世代においても依然として男女間に教育の格差が指摘される。しかし、公立学校において安価に教育を受けられる環境が用意されているおかげで、女子の子供も比較的教育を享受しやすく、その結果男女間の文盲率の格差の割合は成人世代に比べて小さくなっている。次にカースト別にみても。公立学校・私立学校ともにほとんどのカースト・グループの子供が含まれており、カーストによる区別は制度的にはみられない。しかし、その割合でみるとカースト間でかなりの相違がみられる。各カーストごとの私立学校の占有率²⁶⁾をもとめてみると、ブラーミンが61.5%、ラージプート77.4%、ナーイ55.6%、ドービー100%、ジャータブ11.1%、バルミキ12.5%であり、子供数の少ないドービーは別として、ブラーミン・ラージプート・ナーイと指定カーストであるジャータブ・バルミキの間には明白な違いのあることが指摘される。とはいえ、ジャータブ、バルミキの子供も、高額な学費を必要とする私立学校に在籍していることは事実であり、カーストの枠を超えて、高いレベルの教育を受けられる機会が提供されるようになっている。

2. インフラ整備

ここでは、村内のインフラとして道路、電気、電話に注目して考察する。

道路の整備は、近年ではジャワハル雇用事業 (Jawahar Roza Yojina)²⁷⁾ の予算で実施されている。外周道路の整備からはじまり、次にラージプートとブラーミンが集住している地区の道路の整備がなされ、1995年以降になってジャータブが集住している地区でも煉瓦舗装がなされるようになった。バルミキおよび新住民が集住しているコロニーの地区

では、いまだ舗装道路の整備はなされておらず、特に雨季には極めて不便な状況に直面している（図2参照）。

R村の電化は、1987年以降である。1997年調査によると電灯の所有率は94.9%に達しており、ほぼすべての家庭が電化の恩恵を受けているといえよう。また家電品の所有状況を見ると、電灯に続いて普及しているものは、扇風機の83.7%、白黒テレビの63.3%であった。一方、カラーテレビの普及率は5.1%とまだ低いレベルにある。カラーテレビや水循環式のクーラーといった高級消費財を所有する世帯はいずれもはラージプートとブラーミンだけであった。またあるラージプートの世帯では洗濯機が確認された²⁸⁾。

電話は1993年に最初の電話が導入された。最初に導入したのはブラーミンとラージプートの家族であった。現在13の電話が導入されているが、いずれもブラーミンとラージプートの家族に限られている。これは電話のラインが集落の北西部から整備されているため、集落の西に集住しているラージプートとブラーミンが導入しやすい位置にあることが、2つのカースト・グループに独占されている要因のひとつである。ラインから離れているジャータブの世帯では、彼らが住む区域までのラインの整備が行わなければならない。しかし調査時にラインの延長工事がなされていたので、近い将来、ジャータブなどの世帯での電話の普及が予想される。

3. 消費と消費者行動

今回の調査では、最寄品、買廻品、高級品の3つのカテゴリーに対して、それぞれ2もしくは3つの品目を取りあげ、その購買先についてアンケート調査を行った。具体的には32の世帯²⁹⁾に対して、最寄品（茶、スパイス）、買廻品（食器、子供服、婦人服）、高級品（自転車（バイク・スクーターを含む）、テレビ）について、どこで購入しているかを順番をつけて回答を求めた。

表12は、それぞれの品目ごとに購買地の多かったものの1位と2位を示したものである。最寄品のうち「茶」と「スパイス」は、いずれも村内商店で購入が第1位であった。買廻品においては、「子供服」と「婦人服」は隣村にある最も近い近隣市場、そして高級品である「自転車・バイク」と「テレビ」はデリーやノイダというように、単価が高くなるにつれて、購買地がより上位の中心地になるという中心地選好の傾向がみいだされた。またカースト別にそれぞれの購買地の傾向をみると、ブラーミンは、すべての品目においてノイダ、デリーでの購買の割合が高い。これはカースト内に村で雑貨店を営んでいる者がおり、その店の仕入れがノイダ、デリーであることや、ブラーミンの13世帯中4世帯は、1989年に家庭の理由でデリーから戻ってきた世帯であることが反映していると考えられる。

表12 R村における購買行動の状況
Table 12 Consumers' behavior in R village

区分	品目	行商人	村内商店	近接市場	ノイダ	デリー	結婚
最寄品	茶		1			2	
	スパイス	2	1				
買廻品	食器	1			2		
	子供服			1	2		
	婦人服(サリー)			1	2		
高級品	自転車・バイク				2	1	
	テレビ				2		1

それぞれの数値は、その品目内で回答数の多い順を示す。ただし3位以下は省略した。
出所：現地アンケート調査

このようにインドにおいても、購買地の選好は、中心地性だけでなく、消費者自身の属性も購買行動に反映されていることが指摘される。

4. 信仰・寺院・儀礼

R村の旧住民はすべてヒンドゥー教徒である。それを反映して村内に立地する3つの寺院は、すべてヒンドゥー寺院であった。

さて儀礼にかかわる最も重要なものの一つは結婚式である。ここでカーストと結婚式についてみると、極めて特徴的な傾向がみいだされた。それは、村内のブラーミンの式への関与の仕方である。ブラーミンは結婚式を執り行うが、その範囲はブラーミン、ラージプート、ナーイ、ドービーのカーストに限っている。ヒンドゥー社会のヒエラルキーからいえば、ドービーはアウト・カーストに入るが、R村においては特に区別されていない。ドービー以外のアウト・カーストであるジャータブ、バルミキは村内のブラーミンではなく、それぞれのカースト内の僧侶を他村から招いて、式を執り行っている。このように、儀式においては、現在においてもカーストの単位が明確に意識されている。

おわりに

R村における人口、行政・政治、経済、生活・社会環境の諸側面から都市化・工業化の影響について考察してきた。最後にまとめとして、史的系列とカーストの視点から都市化・工業化の影響を再整理する。

(1) 史的系列にみた都市化・工業化の進展 (表13)

R村の人々は200年前にハリヤーナーよりこの地域に移動し、そして1940年代にヤムナー川の流路変更にもなって集落が移転した後、現在のR村がしだいに形づけられてきた。当時はヤムナー川をはさんで、デリーの対岸に位置するとはいえ、その位置的な恩恵を受けることはなく、毎年のように発生するヤムナー川の氾濫によって、R村の経済は低位な状態に置かれていた。

1950年代・60年代に入っても、その状況には大きな変化はみられなかった。特に1960年代後半には、周辺の地域では緑の革命が導入され、農業の飛躍的な発展段階を迎えたにもかかわらず、R村は依然として低い経済状況に置かれていた。

1970年代に入ってこのような状況は大きく変わり、R村に都市化・工業化の影響がでてくることになる。その第1のきっかけがヤムナー川の堤防の完成である。これにより、緑の革命の導入を阻害していた要因がなくなり、R村ではいっきに高収量品種、化学肥料の導入ならびにポンプによる井戸灌漑が展開する。食生活も変化し、ジョワール・バジラの稗類から小麦を主食とするようになった。そして第2の変化がノイダ工業団地開発の開始である。その開発は、それまで村内で農業労働やジャージマーニー制によってでしか職を得られなかった下層のカースト・グループの村人に、村外での職を得る機会を提供するようになった。そのことは地主-小作あるいは雇用者-非雇用者という関係に起因する社会的規制をなくすことにつながっていった。

そして1980年代に入ると、ジャージマーニー制の形態はほとんど廃止され、一部のドービーやナーイはそれぞれの伝統的職業を継続しているが、支払いの方法は現金制に移行している。またノイダ橋が完成することで、デリーとの近接性は格段に向上する。そしてノイダ工業団地の開発が進むに従って、ヤムナー川の左岸においても、大きな市場・消費地が形成されていった。農業面において、これらの大市場を前提にした野菜栽培（スイカ、ダイコン）がなされ、しだいに近郊農業の経営が取り入れられてくるようになった。しかし農業労働者であった者が村外で職を得ることで、村内の農業労働者の絶対的不足が発生するようになった。そこでラージプートなどの地主はトラクターなど機械化による労働力の削減を図る一方で、村外からの農業労働者を導入することで、その問題に対応している。1980年代には、生活・社会環境面でも大きな変化がみられた。道路の舗装化や電化等で、しだいに住環境が整えられ、都市的生活も流入するようになった。さらにコロニーと呼ばれる新住民が多く居住する区域も形成をはじめた。

1990年代に入っても、都市化・工業化の影響はますます色濃く出てくるようになる。商業面では今後の都市化を見込んで、先行的に店舗の出店がみられ、工業面でも村内にクリー

表13 R村の年表
Table 13 Chronological table of R village

年代	主要な事項	人口構造	行政・政治構造	経済構造			社会・生活環境
				農業	商業	工業	
2000年前	<ul style="list-style-type: none"> ・ハリヤナーよりC村への移住 ・C村から独立, R村の設立 						
1940年代	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤムナー川の流路変更 ・集落の移転 	<ul style="list-style-type: none"> ・カースト・グループ別の住み分けによる居住 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンチャヤット制の導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・村内店舗の開店 			
1950・60年代	<ul style="list-style-type: none"> ・緑の革命 (1960年代後半～) 		<ul style="list-style-type: none"> ・ザミーンダール制廃止と土地改革の実施 				<ul style="list-style-type: none"> ・公立学校の設立 (1959年)
1970年代	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤムナー川堤防の完成 (1976年) ・ノイダ工業団地開発の開始 (1977年) 		<ul style="list-style-type: none"> ・ガジアバード県の新設 (1974年) 	<ul style="list-style-type: none"> ・高収量品種・化学肥料の導入 ・サトウキビ栽培の衰退 ・主食用としての小麦栽培の増加 ・飼料用としてのジョワール栽培への転換 ・トラクタの導入 (1976年～) 			
1980年代	<ul style="list-style-type: none"> ・ノイダ橋の完成 (1984年) 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロニー等への新住民の流入 	<ul style="list-style-type: none"> ・BDCの導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャジマニー制の崩壊と現金支払い制への移行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャジマニー制の崩壊 (ドービー, ナーイ) ・保留制度による公務員 (清瀬) 職の獲得 (パルミキ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・村内道路の舗装化 (1982年～) ・電化 (1988年～) ・テレビの普及 (1988年～) ・コロニーの開発の開始 (1988年～) 	
1990年代	<ul style="list-style-type: none"> ・ノイダ橋の補強完了 (1992年) 	<ul style="list-style-type: none"> ・村内での借家経営の開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・S村との合併による新しい行政村の設定 (1995年) ・ゴータマブツタナガール県の新設 (1997年) 	<ul style="list-style-type: none"> ・村内店舗の開店ラッシュ (1994年～) 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリナー製造工場の操業開始 (1992年) ・ベン製造工場の操業開始 (1997年) 	<ul style="list-style-type: none"> ・公立学校の一時休校 (1992・1995年) ・私立学校の設立 (1992年) ・電話の普及 (1993年～) ・私立学校校舎の新設 (1994年) 	

ナー製造工場とペン製作工場が操業を始めるようになった。その一方で農業面では、一部の農家をのぞいて営農意欲は低下傾向にあり、集約的な農業労働を必要とする近郊農業としての野菜の栽培は減少し、ミルク生産と結びついた飼料用作物の栽培に傾倒するようになってきている。生活・社会環境面では、借家経営の開始など新住民を受け入れる素地がしだいに形成されつつある。また教育においては、私立学校の設立をはじめ、多少のカースト間の差はあるものの、教育熱は高まりつつある。

以上のように、R村の都市化・工業化の影響を時系列で追ってみると、1970年代がターニング・ポイントであり、ヤムナー川堤防の完成、ノイダ工業団地開発、ノイダ橋の完成の3つが大きな促進要因であったと指摘されよう。それぞれ土地条件の改善、労働市場・消費地の提供、デリーとの近接性の向上という形で、R村の発展に寄与した。

(2) カースト・グループと都市化・工業化

先の3つの都市化・工業化の促進要因は、カーストやジャジマーニー制を軸とするインド農村の社会構造にどのような変化をもたらし、それぞれのカースト・グループはどのように対応したのであろうか。R村のそれぞれのカースト・グループ別に個々の対応を整理してみよう。

ブラーミンについては、R村への都市化・工業化の影響は、直接的には大きくはなかったと判断される。彼らは、高い教育水準を前提に、早くからデリーなどの都市との結びつきをもっていたからである。しかしデリーとの近接性が向上したことは、それまでデリーなどに出ていた者が、村に戻ってくることへの抵抗を少なくしていることも事実であり、また村内で工場経営などの新しいビジネスを展開する者も出てきた。その一方で、あるブラーミンは村内に寺院を建立し、また専従ではないが結婚等の儀礼の際には司祭を勤めている。その司祭を行う範囲は、カースト・グループの意識が強く反映されており、都市化・工業化のなかでも、このような信仰や儀礼の部分はあまり変化しない点であると思われる。

ラージプートは地主階層として、都市化・工業化の影響を最も強く受けたカースト・グループの一つであるといえる。ノイダ工業団地開発による労働市場拡大の影響は、地主層にとってプラス面というよりはマイナス面であったかもしれない。絶対的な農業労働者不足に直面し、彼らはトラクターの導入や村外農業労働者の導入という形で対応をしている。一方、プラス面としては、彼ら自身の村外での就労機会の増加、資産を運用する形で村内に学校や商店、さらには借家の経営に乗り出すなど中間カースト的側面をみせている。

ナーイ、ドービーにおいては、伝統的職業である理髪業、洗濯業以外の職への展開がみられた。また一部には伝統的職業を継続する者がいるが、ジャジマーニー制によるものか

ら離れ、支払いの方法も現金制に完全に移行している。

ジャータブの都市化・工業化への対応は極めて特徴的であったといえる。それはこれまで唯一の就業機会であった村内の農業労働者から離れ、村内・村外の多様な職への展開をみせている。村内の農業労働者の立場を離れることは、地主（ラージプート）との直接的な社会関係からはなれることであり、今後、この点は村内の社会構造に大きな変化をもたらすものと予想される。

バルミキはジャータブ以上に村外での就業志向が強い。彼らの伝統的職業は清掃である。それは都市社会においても必要な職であり、彼らは清掃を主とする職を村外で獲得している。もちろんそれはジャジマーニー制とは離れた形での、伝統的職業の継続である。その中で、公務員として彼らの多くが雇用されており、留保制度の果たしている役割は大きい。

以上のように、都市化・工業化に対してR村の各カースト・グループの各々の対応を明らかにした。その対応の中で、特に就業構造の変化は、今後のインド農村の社会構造に大きな変革をもたらしていくと予想される。現時点では、各カースト・グループ間に資産格差があり、商店・借家経営や工場経営はブラーミンやラージプートが中心であるが、村外での現金収入の増加や教育面でもカースト間の格差が小さくなっていることから、将来的にはジャータブやバルミキなどの下層に位置づけられていたカースト・グループにおいてもこの分野へ進出してくる者が増えてくると予想される。

1990年代に入り経済開放政策が徹底されるに伴い一層加速度を増し、今やインドは独立以来未曾有の工業発展期を迎えるに至っている（岡橋編，1997）。本稿では、都市化・工業化はインド農村に対して外的営力として働きカーストやジャジマーニー制などで特徴づけられてきたインド農村社会が確実に変化していること、そしてその変化においては既存の社会・経済条件の違いから、カーストごとに異なる対応がなされていることを明らかにした。そして既存の社会構造を大きく変化させる要因は就業構造の変化にあると指摘しておきたい。就業構造の変化をもたらしているのは、都市化・工業化による村外の労働市場の形成である。今後の研究においては、都市化・工業化の進展する過程で労働市場がどのように形成されているのか、またその形態のあり方や進展の程度において地域構造がどのように変化していくかを明らかにすることが重要な課題であるといえよう。

[付記]

本研究は、平成9年度文部省科学研究費補助金・国際学術研究「インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容」（代表者：岡橋秀典，課題番号：08041017）による研究成果の一部である。本稿の一部は、1998年度人文地理学会大会において発表した。

現地調査に当たっては、Jawaharlal Nehru 大学の R. C. Sharma 教授, Jamia Millia Islamia 大学の M. Ishitaq 准教授のお世話になりました。また R 村の方々には、多大なご協力をいただき、そして広島大学岡橋秀典教授をはじめとする調査メンバー各位からは、有益なご助言を得た。記して感謝申し上げます。

注

- 1) ここでいうモービリティとは、空間的移動ではなく、社会階層間の移動をさす。
- 2) 中間カースト（あるいは中間的農業諸ジャーティ）の定義について、押川は、「中・小規模農民や都市中間層を中心とし、カーストではおおむね中間的な位置にある諸集団」（押川，1989）とし、その後、農民に限定して、新たに「中間カーストとは、インド各地で中農層を主体としつつも、零細規模農民から一部富農層までも含む幅広い農民カーストをさす」（押川，1990a）と定義づけている。また福永（1990）は中間ジャーティ集団（intermediate jatis）と表現し、「社会構造の分析単位としてジャーティ集団を取り上げ、各集団を社会・経済的なヒエラルキーにおいて上位、中位、下位の3層に分類し、上位と下位にはさまれ、中位に位置する集団を中間ジャーティ集団」とし、その分類基準に、土地所有面積、人口あるいは世帯数、宗教的秩序ヒエラルキーの3点を用いて、抽出している。押川が、中間カーストを社会的に顕著に台頭し、社会変動をもたらしている点に注目しているのに対して、福永の議論では、中間に位置することからもたらされる社会への影響（二重対抗関係）に着目している。本稿では、基本的には押川の定義にそって、近年の社会経済変化の中で、社会経済的に上昇するあるいは上昇を志向しているカースト集団という意味で、中間カーストという用語を使用する。なお、経済的自由化とともに、消費志向の強い購買力をもった階層が成立している。それらは「新中間層」と呼ばれているが、それはかれらの経済的特性のみに焦点をあてており、既存の社会階層（カースト）とのつながりの薄い概念である。
- 3) 今日において、カーストを分析単位として取り扱うことについて押川（1990a）は、“カーストをあたかも所与の集団単位であるかのように扱うとすれば、（中略）様々な個人的モービリティを看過することになるのみならず、多様な個人を内在する存在としてのカーストの動態も見誤る”との見解を示した上で、“個人的なモービリティがカーストと関係なく存在するわけでもない。（中略）現在最も問われている現実的な課題は、個人的なモービリティをもたらす諸要因の分析をもとに、どのカーストが、どのような幅と方向性をもつ変化を遂げつつあるかを検討することにある”と指摘している。本稿でもこの立場にたって、カーストを分析単位として取り扱うことにした。
カーストという用語については、わが国ではインド古来の四種姓の意味で理解されることが多い。しかしインド人はこの種姓をヴァルナと呼んできた。インドにおけるカーストは社会集団、結婚、食事、職業などに関する厳格な規制のもとにおかれた排他的な社会集団の呼称であり、生まれを同じくする者の集団を意味するジャーティという語で呼んでいる（山崎，1992参照）。最近のわが国の研究では、ジャーティと言う意味でカーストが多く使用されていることから、本稿でもそれに従い、とくに断りのない限りインドにおけるジャーティの意味でカーストという用語を用いる。
- 4) R村のパンチャーヤットより入手した。
- 5) 選挙人名簿から漏れていた者についても、現地で確認された時点で、追加した。
- 6) ノイダ（NOIDA）とは、New Okhla Industrial Development Authority の頭文字をつなげたものである。ノイダ工業団地の計画総面積は120km²、最終計画人口は375,000人である（Saha and Rao, 1995）。
- 7) ドアブ（Doab）と呼ばれる。
- 8) 旧住民と新住民を区分する基準は、村人の判断をもとにしている。基本的には、1940年代の集落移転の際に移動した家族およびその子孫が旧住民であり、それより後、特にコロニーの建設にともなって、新たに移転してきた家族を新住民としている。なおコロニー内居住者であっても、旧住民に親戚関係が

ある者は旧住民とした。

- 9) Shrinivas (1987)
- 10) 石加工を伝統的職業とするカースト。
- 11) インドの初代首相であるネルーは、インドの社会構造を支える3つの柱として、カースト、村落共同体、合同家族をあげている(ネルー, 1953)。
- 12) 全国的なインドの家族形態に関する研究として、押川(1992)を参照のこと。
- 13) 現地調査における世帯の定義は次の通りである。

[Family is considered as an economic unit. Family consists of both members living with householder and ones who live outside sending/receiving money (such as students who are receiving money from House-holder and workers sending money to House-holder). In the case that the household economy is separately managed even if all the people are living together in the same house, treat each household as an independent family.]

このように、本調査では経済的視点に重点をおいている。なおインドのセンサス局の定義では「世帯とは、共に居住し、緊要な用務のない限り一つの調理される食事をともにする人々の集団」とされている。

- 14) ウツタル・プラデーシュ州東部を調査した福永(1990)によると、チャウハーンと同じくラージプートであるタークルは拡大家族制の維持・継続を理由として多人数で構成されるのに対して、チャマールは核家族傾向が強いことを指摘している。事例村でのタークルの平均構成員数は12.79人であり、チャマールのそれは9.08人であった。R村の値は、それに比して、かなり低い値であり、全てのカースト・グループが核家族傾向が高いといえる。
- 15) 家族形態の分類の方法は杉本(1995)の類型を用いた。それぞれの類型は次のように定義づけられる。単身家族：単身者のみの世帯。準核家族：未亡人または寡婦とその子供または配偶者のないキョウダイからなる世帯。核家族：夫婦と未婚の子供からなる世帯(子供のいない夫婦を含む)。補足核家族：核家族に加えて死別したり離婚して配偶者のいない親族(親, キョウダイ, オジ, オバなど)を同居させている世帯。合同家族：複数の夫婦とその未婚の子供およびその他の親族からなる世帯。
- 16) 有権者人口が1000人をもって、1行政村を設定する。R村は1000人を割っていたので、隣のS村と合併した。
- 17) 留保制度については、押川(1990b)を参照のこと。
- 18) 1995年の選挙において留保制度による議席は女性用議席が4、指定カースト・指定部族用議席が2であった。
- 19) 補助金や補助事業が、パンチャーヤット内の政治を強く反映していることは、同じウツタル・プラデーシュ州の農村を調査した近藤(1994)でも報告されている。
- 20) 表5は主職業に関する回答をまとめたもので、副業として農業労働者として農業に従事しているものはかなりいる。
- 21) 悉皆調査のデータであるため、属人データである。したがってこの値には近隣の村の土地も含んでいる。
- 22) カリフは、モンスーンによる降水を前提として栽培するもので、6月から9月までの雨季の作期である。ラビは10月から3月の乾季、ザイドは4月から5月の暑季の作期である。なお、それぞれの期間は、地域によって多少異なる。
- 23) ここでいう野菜は、作物名が明らかになったもののうち、表中の野菜、野菜(?), その他の野菜、ジャガイモ、ニンジン、ダイコン、タマネギ、トマト、スイカを合計したものである。
- 24) 聞き取りによれば、1年間で1世帯あたり20~40kgのバジラあるいはジョワールを受け取っていた。
- 25) インドにおいては、運営費の公的負担の割合によって、次の3種類に分類される。(1) Government School : 100%公的負担によって運営される学校。(2) Government under taking School : 政府の補助を受けている。例えば、建物等は政府が建設し、その後の運用は個人(法人)が行っている学校。(3) Private (Public) School : 公的負担を全く受けていない学校。R村の私立学校は最後の Private (Public) School である。
- 26) 各カーストごとに当該学年の児童のうち、私立学校に登録している割合。
- 27) 同計画は第7次五カ年計画の1989年より、導入された計画である。同計画は、まず農村地域における

- 雇用の創出，次に農村地域のインフラの整備，さらに経済的後進諸階級，指定部族，指定カースト層の生活改善への寄与を目的としている（Government of India, 1997）。
- 28) この世帯は一時期デリーに住んでおり，都市生活の経験を有する。またこの世帯は，家にパラボラアンテナを設置し，村内でのケーブルテレビ事業を計画している。なお洗濯機は嫁の持参物（ダウリ）の一つである。
- 29) 各カーストごとの世帯の割合をもとにサンプル総数を予め決め，各カーストごとに，無作為に世帯を抽出した。

文献

- 岡橋秀典編（1997）：『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容—マディヤ・プラデーシュ州ピータンプル工業成長センターの事例』広島大学総合地誌研究資料センター，263p.
- 押川文子（1989）：特集にあたって。アジア経済，30-3，p. 2.
- 押川文子編（1990a）：『インドの社会経済発展とカースト』アジア経済研究所，pp. i - iii.
- 押川文子（1990b）：社会制度と留保制度—カルナータカ州とグジャラート州を事例に—。押川文子編『インドの社会経済発展とカースト』アジア経済研究所，pp. 3-51.
- 押川文子（1992）：「家族」の変化と人口—その1960年代以降の地域的傾向をてがかりに—。押川文子編『インド農村の社会政治変容と開発』アジア経済研究所，pp. 3-43.
- 近藤則夫（1994）：農村開発と村の政治—北インドの2村の事例。南アジア研究，6，pp. 83-112.
- 杉本星子（1995）：インド合同家族論再考—南インドの村落研究からの展望—。民族学研究，59-4，pp. 313-341.
- ネルー，J（辻直四郎・蠟山訳）（1953）：『インドの発見（上・下）』岩波書店。
- 福永正明（1990）：北インド東部地域における社会政治変動—中間ジャーティ集団の二重対抗関係—。押川文子編『インドの社会経済発展とカースト』アジア経済研究所，pp. 141-178.
- 藤井毅（1992）：チャマル。辛島昇他編『南アジアを知る事典』平凡社，p. 456.
- 山崎元一（1992）：カースト。辛島昇他編『南アジアを知る事典』平凡社，p. 136.
- Etienne, Gilbert（1982）：*India's Changing Rural Scene 1963-1979*. Oxford, DelhiP, 231p.
- Government of India（1966）：*Bulendshahr Deistrict 1961, District Census Handbook*.
- Government of India（1981）：*Census of India 1981 Series 1 India*.
- Government of India（1997）：*Indai 1996 - A Reffernece Annual-*. p. 344.
- Saha, A.K. and Rao, P.S.N.（1995）：*Noida survey 1995 for revision of master palan-2011*. School of Planning and Architecture, New Delhi, 141p.
- Shrinivas, M.N.（1987）：*The Dominant Caste and Other Essays*. Oxford University Press, Delhi, 201p.

Urban and Industrial Impacts on Rural India : A Case Study of Suburban Village in Delhi Metropolitan Area

Takeshi MINAMINO*

The urbanization and industrialization in India has progressed rapidly since the opening policy of the economy started. The industrialization has made great impacts on rural Indian villages, particularly on their social structure and stratification. The purpose of this study is to reveal the influences of the urbanization and industrialization on rural villages in India. It focuses on the economic aspect as well as the demographic, politic, administrative and social aspects of the change, based on the result of census survey and intensive survey carried out in 1997. The caste system is taken as a criterion to analyze this effect. R. village in the Gotama Buddha Nagar District, Utter Pradesh, is chosen as a sample village. This village is multi-caste society, consisting with wide range of caste classes from general castes to the Schedule Castes.

During the 1950's and 60's, R village was still underdeveloped in spite of the condition that it was closed to Delhi, the capital of India. The Yamuna River, flowing between this village and Delhi, often flooded by the monsoon rain, and it gave serious damages to the village. The Green Revolution encouraged by the government was being spread around this area at the end of the 60's, but the village was unable to receive its effect because of the frequent floods. However, in the 70's, there was a turning point in that situation. Firstly, an embankment was constructed along the Yamuna River. This made possible for the village to accept the Green Revolution; soon, well irrigation was made and High Yield Varieties were planted. Secondly, the construction of NOIDA (New Okhla Industrial Development Authority), one of the biggest industrial estates in Utter Pradesh, began in 1977. This brought job opportunities to the lower caste villagers who had had no option except doing agricultural laborwork or craftman-work under the *jajmani* system.

In the 80's, the opportunities of getting jobs in NOIDA increased. One of the government policies against the social inequality called the Reservation for Schedule Castes made certain lower caste villagers obtain jobs. A new bridge was built near the

village which made easier to go to Delhi and to bring commercialization to the village. The traditional social structure in the village also began to change. The *jajmani* system gradually disappeared; the way of payment has shifted from in kind to cash; agricultural labor market in the village became short due to the better job opportunity outside the village. Against the shortage of agricultural labors, the landowners have shown reactions in two ways. One was mechanization; they bought tractors to cover the deficit. The other was the employment of workers from other regions, mainly Bihar.

The effect was also seen at the social level. The infrastructure of the village was improved by paving roads and introducing electricity, telephone, T.V., etc.. New comers flowed into the village and formed a new colony. In the 90's, the effect became visible on landscape in the village. Two large factories were built and 14 shops opened within five years. A few apartment buildings for rent were constructed for the new comers. A new private school was built in addition to a public one, which indicates that the villagers became more conscious about education even in lower caste groups. In agriculture, the production of fodder for cattle increased, and, as a result, the business with milk productions became more active.

There were three main causes which brought significant changes to the village: the construction of the embankment, the development of NOIDA, and the construction of the bridge. These changes eventually led the improvement of the land condition, the markets, the labor market, and the accessibility to Delhi. Particularly, the enlargement of the labor market brought drastic changes to the lower cast groups in terms of job opportunities and disappearance of the *jajmani* system.